

『ダンケルク』ジョシュア・レヴィーン 著 武藤陽生 訳

これは戦争映画ではない。サバイバルの物語だ——！  
全米興行収入ぶっちぎり1位！9/9(土)日本公開！！

鬼才クリスティー・ノーラン監督のメガヒット最新作の公式関連本。  
WWIIの軌跡の救出作戦、ダンケルクの真実とは？！

クリスティー・ノーラン監督の特別インタビュー収録！

(一部抜粋)

ダンケルクを神話と——もしくは現代の神話と——まあ、なんと呼んだとしても、全然大げさではない。実際にボートに乗って海峡を横断してみれば、彼らの勇敢さの片鱗が窺える。ほんとうに勇氣あることだよ。

それから数年経って、体験者の証言を読みはじめた。どうして誰もこれを映画にしないのかと不思議に思っていたんだ。少なくとも、最近では映画化されていない。人間の物語のなかでも、最高にすばらしいもののひとつなのに。それで、どうやって映画化すればいいとか、どうして誰も映画化していないのかということは一とまず置いておいて、ダンケルクに関する本を読みあさったんだ。最終的にたどり着いた結論は、これが映画化されないのは、敗北の物語だからだろうということだった。それにどう切り取っても壮大な作品になってしまうから、製作費もかかる。私たちはもっとこぢんまりした方法でアプローチしようとした。でも、やはり大作になってしまうから、うしろ盾としてハリウッドという工業的なシステムのリソースが必要だと考えた。そうしたリソースを——どれだけすばらしいとはいえ——敗北の物語に使うのは、ちょっと慎重を要することだ。でも、私たちがこの物語に惹かれたのは、これが勝利でも戦闘でもなく、撤退の物語、生還(サバイバル)の物語だからだったんだ。

私はこの作品を戦争映画だとは思っていない。これはサバイバルの物語だ。

『死者の雨 上・下』ベルナール・ミニエ 著 坂田雪子 訳

フランス国内累計発行部数 150万部 を誇るベストセラー作家！

次なるピエール・ルメートルはベルナール・ミニエで決まり！！

警部マルタン・セルヴァズの事件ファイル#2

今年1月にフランスのテレビ局M6により全6エピソードでドラマ化されたシリーズ第1弾の『氷結』では、雪と氷に閉ざされたピレネー山麓を舞台に馬殺しに端を発する奇っ怪な連続殺人事件を描いたミニエ。

美しい自然、善意の人々——目に見えるユートピアの裏に渦巻く人間の欲と、

息がつまるような閉鎖的な空気感を描くその筆は本作でも健在。今回はとある平和な学園都市でエリート進学校に通う17歳の少年が殺人容疑で逮捕されることからスタートする。被害者は美貌の女性教師。

嵐の夜、全裸で縛られ水責めにされていた(このあたりの厭らしい設定も健在)。二人はただならぬ関係にあったのか？ 人気者の生徒には隠された顔があったのか？ 状況証拠がすべて少年を指すなか、セルヴァズはひとり違和感を覚えて捜査を突き進める。やがて逃亡中の連続殺人鬼ハルトマンの不気味が影が周囲でちらつきはじめ……。

マラーを聴きながら現場に臨場し、捜査に行き詰まるとラテン語でひとりごちるフランス男セルヴァズ。

若干こじらせ気味のこの警部と、彼に歪んだ愛着を寄せるシリアルキラーの関係は、シリーズ通して描かれていくようで、今作でもあっと驚くドンデン返しを用意されていますよ!! (担当:O)